

---

# ひぐらしのなく頃に 解

泉海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 解

### 【Nコード】

N2929P

### 【作者名】

泉海斗

### 【あらすじ】

神隠し編から時変り編までの世界を巡った前原圭一。

跳ね返され続けてきた何かに気づき始める。

100年間続いてきたその運命の袋小路を破る世界はあるのか・・・  
???

彼らの前に現れる角の生えた巫女服の少女。

不思議な赤い瞳。

忘れかけていた幼馴染。

今、前原圭一を中心に部活メンバーがその運命に立ち向かう。

## 死と生の狭間で（前書き）

出題編であるひぐらしのなく頃にが終わりましたので、回答編のひぐらしのなく頃に解を投稿させていただきます。

どんな惨劇が起き、どのように立ち向かっていくのか。

皆様にお楽しみいただければ幸いです。

## 死と生の狭間で

ここは現実世界都市の世界の狭間。暗い空間が1人の少女を包み込んでいる。少女の周りには何やら欠片のようなものが漂っている。

「また死んだのね・・・」

悲しそうな表情で言う少女。オヤシロ様の生まれ変わりといわれる古手梨花である。

「これは時変り編・・・でもすでにその世界では惨劇が起きている・・・」

その一つの欠片を見つめながら言う。それに映し出されているのは何かに立ち向かっている男性の姿だ。瞳は真っ赤でまるで鬼人のごとき動きで戦っている。

「くすくす、また来たのね。それにしてもあなたたちは何度見ても面白いわね。まったくこの私に退屈というものを与えないわ」

目の前には自分とそっくりの1人の少女がいる。そしておくにはまた何人かの人がある。しかし目を凝らしても見えない。

「あなたには見えないわ。私たち魔女はね」

「魔女ですって??」

目の前の少女がという言葉に疑問を持つ梨花。すると置くから声がする。

「妾たちがいる場所とはまた違う。お前がいるそことは時空がつかっていないのさ」

「はつきり言って、絶対ベルンそっくりよねあの子」

「あんたがそういうならそうなんじゃなあーい?？」

「ウー、私は一緒に遊びたいけどな」

「お姉ちゃん、ここは我慢して」

数人の声が聞こえてくる。

「あなたの名前、ベルンて言うの??」

「正しくはベルンカステル、奇跡の魔女とも言われるわね」

「奇跡・・・起きてくれればいいけど」

いくつ物世界を渡ってきた李下だが、すべて見えない壁に跳ね返されてきた。何とかしようとして移行したが、すべては徒労に終わっていた。なにか奇跡が起きてくれればと神にでも願いたい気持ちだ。

「そんなにつらいの??だったら面白いものでもあげちゃおうっかなー」

「ちよっとラムダ??これは私の余興なの。勝手なことはやめてほしいわ」

「何つれないこと言ってんのよベルンたらー。少し喰らい私にも楽しませてよ」

「何言うの??あなたが絶対と言ったらそれは絶対になるの。それがどんなことか分かってるの??」

「だって私は絶対の魔女だから」

それを聞いた梨花はもはや神にもすぐる思いだった。

「だったらその力で、私たちを袋小路から解放して!!」

向こうでは虚を突かれたようだった。

「ざんねーん、それはできないわね」

「ど・・・どうして??」

「だってそうしたら私がベルンに何されるか分からないもん」

もはや何も手は残されていないのかと思う。

「でも少しは加勢してもいいわよー」

「ちよつと邪魔しないでよね」

「いいじゃない。やられっぱなしじゃ面白くないだろうし、ベルンも少し趣向変えたいんじゃない??」

「??」

「いいとこまで言ってそこでつぶされて、絶望ってパターン」

「きゃはははっは!!それさいっこう!!」

「うー、そんなに笑っちゃだめだよ」

それを聞いてこれから何が起きるかと予想するだけでも怖かった。彼女が言ったとおりになったら・・・。もう抜け出せないのかと投げ出したくなる。運命には勝てない・・・。意識が薄れていくなか、理科が最後に聞いたラムダという魔女の言葉。

「面白いからその少年に」

をあげちゃおうっか」

その言葉は梨花にとって聞きなれたものだった。梨花が次に行くのは崇殺しの世界だ。

「ふふ、せいぜい私を退屈させないでほしいわね。前原圭一」

T o b e c o n t i n u e

## 死と生の狭間で（後書き）

海斗「何とかプロログ完成です。でも書いてて長く感じたのは何故だ??それよりも早く投稿したのはやる気持ちは抑えられなかつたからです。明日からまた少しずつ投稿していきたいと思えますので。よろしくお願いします」

次回予告 崇殺し編 吉々イモウト

追記 コメント・評価待ってます!!



きんぐイモウト（前書き）

海斗「書いていると意外と長くなってしまっ泉海斗です」

圭「詰め込みすぎなんじゃないか?？」

海斗「しかしそうでもしなければ、情景とか心情とか、セリフだけでは読み取れない・・・行動からも分かることってあると思わない?？」

圭「それは読者さんが判断することだ」

海斗「それでは第1章崇殺し編スタートです!!」

## きゝイモウトゝ

雛身沢村・・・のどかな田舎として、穢れ一つないような自然あふれたところだ。

快晴の元、太陽の暖かな日差しが村全体に降り注ぎ、柔らかな風が木々や草花を優しく揺らし、仕事に精を出す人々の汗で光る肌を優しく包み込む。

ひぐらしの大合唱。うるさいくらいだが、これもまた雛身沢が今日も平和だということである。しかしそんな雛身輪派の聖女句を破る叫び声が、ここ雛身沢分校から聞こえてきた。

「さあああとおおおこおおお!!」

「きやあああけだものですわあああ!!」

「誰がケダモノダアアア!!」

小さな教室の中を墨汁で真っ黒に染まった少年が、けらけらと笑いながら走って逃げる少女を追いかけている。少年の名は前原圭一。ここ雛身沢村につき最近引越してきた少年だった。そして逃げているのはここ出身の小学6年生北条沙都子。

おてんばでトラップの天才といわれる彼女。毎日のように入り口に仕掛けてはこのように圭一を引掛けているのだ。彼のオーバーな反応が面白く、ついやめられないのだとか。

「捕まえたぞ!!」

「イヤー、離してくださいましこの変態!!」

「誤解を生む言葉を使つなああアア!!」

びしいいつと言つ音が響く。

「ふええええん。圭一さんがたたきましたわー」

「え???え???」

おでこに軽くでこピンをした圭一だが、まさか泣くとは思っても見なかった。想定外のこと戸惑う圭一。そんな彼に向かって飛び掛る黒い影。

「うおおおい!!圭一よ!!俺の沙都子に何しやがるんだ、べらんめい!!」

「お前の!?!」

現れたのは圭一と同じ同級生であり、友達の大葉祐樹だった。そんな彼の顔はもはや般若の如し。周りの小学生たちはみんなおびえてしまっている。

「おいおい、祐樹よ。周りを怖がらせているぞ??」

「その原因はすべてお前だ、圭一」

「俺!?!なんて理不尽な」

泣いて痛さ都子を見れば、セーラー服を着た少女、彼女もまた圭一の同級生で、友達の竜宮レナの胸の中でこちらを見てニヤニヤしていた。

・・・嵌められた!!

見事な策士に嵌ってしまった!!

今圭一の前にいる大場祐樹は言わずと知れたロリコン中学生である。つまり、小さな女の子がいじめられているといてもたってもいられ



「うおおおお！レナ特製ミニハンバーグを貰ったああアア！！」  
「そうはさせませんわよ圭一さん。これはわたくしが最初に目をつけたものですわ」

「何でお前は俺がとろろとするものばかり邪魔して来るんだ沙都子  
おおお」

「みー、圭一と沙都子はいつも仲良しなのです。いいことなのです  
よ、にぱー」

うんうんと皆梨花の言葉に頷く。そんなことないと言い張る二人だが、そのときもまた見事なシンク口を見せ付ける。言った後2人で同じことを言うなと口げんかしている間にほとんど弁当がなくなつたのはまたの話。

現在雛身沢を包み込む空は茜色に染まっていた。夕暮れが部活帰りの圭一たちを赤く染める。プンスカと怒りながらの帰宅である圭一。その姿はエンジェルモートのミニスカメイド服だった。しかし意外に似合っているのは彼の實力だろうか・・・??そんな圭一メイドにくつつくれナ。現在かあいモードであるために逃げ出せないでいる。

「ハウウ！！圭一くんのお肌すべすべしてまるで女の子みたいだよ  
」

「そんなこといわれても嬉しくないわ！！」

「あつはつは、圭ちゃん見事に策に嵌ったからねー」

けらけらと笑う部長の魅音。今日の部活で最後までトップを走っていた圭一だが、沙都子の巧妙な策に嵌ってトップとどんべを交換させられたのだ。鼻高々だった圭一は一気にその鼻をくじかれてしまったのだった。

見下しながら大笑いしていた沙都子だったが、あそこまで見事にやられてしまったら降参するしかなかった。すごいというしかなかった。

「圭ちゃん。もうここでの暮らしには慣れたかな??」

「ああ、最初はどうなるかと思ったけど、そんなに不自由もないかな。むしろこっちのほうが快適かもしれない」

「そういつてくれると嬉しいかな。かな」

「それにしても毎日よく飽きずに沙都子と口げんかできるよね圭ちゃんは」

確かに始めてあったときから喧嘩していたように思える。いつもきつかけは沙都子の仕掛けるトラップであり、沙都子のあの生意気なせりふからである。自分以外にも面白い反応を見せる祐樹もいるし、祐樹だったら喜んでやると思うのだが。

「きつと圭一くんが悟史くんに似てるからじゃないかな。かな」

「悟史くん??って確かロッカーにそんな名前があったな」

「レナ・・・それについては」

「魅いちちゃん、このことは遅かれ早かれ圭一くんも知るんだから、離してもそんなはないと思うし、そのほうが圭一くんのためにもなるよ」

なにやらレナと魅音が話している。どうやら先ほど出た悟史という少年についてらしい。教室にはそんな名前の男子はおらず、名前も飛び交うこともない。しかし気になるのは沙都子と同じ北条という苗字。もしかしたらと思う圭一だった。

「悟史くんはね・・・沙都子の兄なんだよ」

「へー、それで悟史ってやつは今どこに??」

「行方不明なんだよ……」  
「行方……不明……??」

レナも魅音も沈んだ表情で頷く。どうやら昨年しねんの綿流しという祭りをさかいに忽然と姿を消したらしい。それからというものは梨花と一緒に暮らしをしているとのこと。

「沙都子ちゃんはね……きつとさびしんだと思うんだ。悟史くんがいなくなつて、一番頼れるお兄さんがいなくなつちやつたから」  
「だから年も近いし、なんだろうね……雰囲気つてのかな??確かに圭ちゃんは悟史くんに似てるかもね」

その明るい笑顔とか、くしゃくしゃとなでてくれるその暖かい大きな手とか……。

「そつだつたのか……」

沙都子にはそんなつらいことが起きていたのとは圭一は知らなかった。そして狂それを知ることができた。そんな彼女のためにできること。それはたつた一つだった。

「よおおおし、だったら俺が悟史が見つかるまで沙都子の兄になつてやるぜえ!!」

可愛い沙都子いさつこのためならできるとはしてあげたい。そんな気持ちがあふれてきた。

悟史……お前は一体今どこにいるんだ……。

茜色から漆黒の黒に変わりつつある空を見つめながら圭一はそう思

うのだった。

かな かな かな ひぐらしが鳴いている・・・。

T o b e c o n t i n u e d



## きくイモウトく(後書き)

海斗「にーにー宣言」

圭「俺は悟史の代わりににーにーだ」

祐樹「ふざけるな!!俺が何故にーにーではないのだ!!」

魅音「だってあんたがやったら間違いが起こるかもしれないからだよ」

レナ「もしもやったら・・・どうなるかわかってるよね。よね・・・」

海斗「レナさん??まだ鉈は早いと思いますが??」

レナ「あはは、何のことかな海斗さん・・・??」

海斗「ナデモアリマセン」

海斗「怖くなってきたのでここで切らせていただきます。コメント・評価待ってます!!」

次回予告 きくヤサイイタメく

忸々ヤサイイタメ〜（前書き）

海斗「いよいよ圭一と沙都子の話を書ける」

梨花「みー・・・僕もいるのですよ」

海斗「梨花ちゃんは今回引き立て役だから」

梨花「ちゃんと私の出番もあるんでしょうね??」

海斗「あの・・・梨花ちゃん??人が変わってますよ??」

??「あうあう、そんなわけで本編スタートなのですう!!」

## 式々ヤサイイタメ

前原圭一は現在とても危険な状況下に置かれていた。彼の目の前のテーブルの上には一枚の置手紙があった。母藍子からのものだった。

“お父さんの仕事で一週間くらい東京に行きます。お金は置いておいたので、自分で何か作って食べてください”

「俺が料理できないこと知っててこうしたのか……。母さん」

テーブルに手を着いてがっくりとうなだれる圭一。そう、彼はまったくと言っていいほど料理ができないのだ。かつて東京で料理したときはなぜか食器用洗剤を油と間違えて使ってしまった、数日間の腹痛に悩まされた過去を持つ。まともに炊飯器も使えない圭一。

かつては水の量を間違えて勝ちこちの状態で出来上がったときもあった。我慢してチャーハンにしたが、そのとき使ったのが食器用洗剤だった。

あんな思いもうしたくね……。。

そんな風に考えていた圭一だがふと思いついたことがあった。

「そつだ、興宮のスーパーに行こう」

我ながらナイスアイデアだと思った圭一。封筒に入っていた数枚の万札のうち、一枚を財布に入れると鍵をかけてすぐに自転車にまたがり興宮に向かってとんだ。

そしてついた先はスーパー。中に入ると人がわらわらと夕食の食材を購入していた。しかし圭一はというとそんな食材たちが待っているコーナーには行かずに、インスタント食品がぎっしりするコーナーへと誘われるように行った。

「お湯を入れてあつという間に3分で完成つてすばらしいよなー」

次々と買い物籠にカップめんを放り込んでいく圭一。3色カップめんとくれば栄養が偏るのだが、圭一にとっては空腹に苦しむよりだつたらどうてことないことだつた。昼食は職員室でお湯を借りればいいと思つた。ルンルン気分で会計に並ぼうとした。

すると横から聞きなれた声が聞こえてきた。

「圭一なのです。こんばんはなのです。にぱー」

「あらあら圭一さんではありませんの???どうしたのですかこんなところで」

「梨花ちゃんと沙都子・・・なんで2人もこんなところに???」

小学生二人がこんな離れた興宮に買い物とは意外だつたのだ。しかし彼女たちの境遇を考えればそうなるのかと納得する圭一。

「俺は親が東京に行ったから夕食とか明日からの飯を買いだめしに来た」

そんな圭一の言葉を聞いているのかどうか、沙都子は買い物籠をじつと見ていた。そしてため息をつく。

「圭一さん???もしかして1週間カップめんて過ごすおつもりで?」

「ああ、それがどうした??」

今度は沙都子だけではなく梨花もハアとため息をつく。何か自分は悪いことでもしたのであるうかと圭一は狼狽している。そんな圭一を見て沙都子は言う。

「圭一さん??それではまったく栄養が偏ってしまいますわ。少しは料理したらどうですか?」

「アー、それができれば越したことはないんだが・・・」

「み・・・出来ないというのですね」

「面目ない・・・」

すまなそうに言う圭一を見て、2人は苦笑いをする。

「仕方ありませんわね。ここは私が一肌脱ぎますわ」

「え??」

その言葉を一応は正しく認識した圭一だが、祐樹ならまた変な方向に妄想するに違いないと梨花は思っていた。するといきなり沙都子が圭一の片方の手をつかんだ。

「さあ、圭一さん。まずはそのカップめんをすべて返してきてくださいまし」

「は!?!これは俺の命をつなぐ大切な「いいですから!」!」はい!」

反論氏や嘔吐した圭一だが、沙都子の声に思わず返事をしてしまう。しびしぶカップめんを返還し始める。そんな様子をニヤニヤとなにやら笑いながら見ている沙都子。そんな様子をほほえましそうに見ている梨花。

次に圭一が来たのは野菜コーナーだった。聡子がしな決めしながら、圭一が持っているかごのなかにどさどさと入れていく。お金が結構あるということで一氣に1週間分買い込むというのだ。それはいいとして自分は何も料理は出来ないと思う圭一。

真剣に品決めをする沙都子はまさに主婦だった。そんな沙都子を感じした目で見ている圭一に梨花が話しかける。

「沙都子は圭一に何かを作ってあげたいんです」

「俺に???何で???」

「圭一は鈍感なのです。これは先が長いのです」

なにやられたため息をつく梨花。彼女が何を言っているのかわからないという圭一。

「何はなしているのです???さあ、次ぎ行きますわよ」

そんな風を楽しみながらも3人の買い物は続いたのだ。そしてそれから少し時間が過ぎてから前原家に来ている3人。圭一は料理がからつきしということで沙都子と梨花に出て行けと一括され、しょんぼりとしながら今でテレビを見ていた。

しばらくするとカチャカチャと食器のあたる音とジュージューという何かが炒められている音がした。振り返ると必死に小さなからだでフライパンを振っている沙都子の姿が目に入った。汗をかきながらも必死でいてそして真剣な表情で料理を作っている。

あんな大変なことを毎日やっていると考えれば。

俺なんかより・・・よっぽどすごいな。

感心するというまなざしを向けていると、それに沙都子が察知したのか振り向くことはしなかったが。

「圭一さん??そんなにじろじろ見ないでくださいまし。恥ずかしいですわ」

「へいへい」

顔を真っ赤にさせた沙都子を見ただけでも目の保養だと思いながら圭一は再びテレビに目を戻す。勇気が聞いたら嫉妬するだろうなと思う圭一だった。それからしばらくしてから、圭一にも仕事が終わってきた。皿を準備してくれというのだった。

出来立ての料理である野菜炒めの載った大皿や、それをよそう小皿、茶碗と汁物を入れるおわん、箸を準備する。見計らったように炊飯器が出来たことを伝える。要約できた料理はいたってシンプルなものだったが、圭一からしてみれば嬉しいものだった。

『いただきます』

3人で一緒に言ってから箸を勧める。小学生が作ったとは思えない絶品だった。次々に箸が進む。ご飯を一体何倍お代わりしたかわからない。その間にウマイウマイを連呼して食べていたことは覚えている。

「圭一さん、そんなに慌てなくてもたくさんありますわ」

「みー、圭一は沙都子の料理にめろめろなのです」

「な!?!梨花何へんなことを言ってるのですの!?!」

「みー、本当のことなのです」

顔を赤くしながら文句を言う沙都子とそれを軽くかわす梨花。それを見て笑う圭一。まるで家族のようなひと時だった。それからしばらくして夜の9時を回ろうとしていた。そろそろ帰るとなると2人を途中まで送っていく圭一。ふと隣に梨花が現れた。

「圭一には感謝しなきゃいけないのです」

「どういうことだ??むしろ感謝するのは俺のほうかと・・・」

「沙都子のことです。悟史についてはレナや魅力に聞いていると思いますです」

「ああ・・・」

沙都子の兄・・・悟史が行方不明ということ。今日の帰り道で聞いたことだった。彼が帰ってくるまで自分が兄代わりとなってやろうと思ったのは嘘ではない。

「僕と沙都子はずっと一緒に住んでいます、あんな楽しそう笑顔を見たのは初めてなのです」

「そうなのか??」

「はいなのです。いつも寂しさがこもった笑いしかしない沙都子があそこまで楽しそうに、そして必死に料理しているなんて初めてなのですよ」

「かなりおいしかったしな。明日も残った野菜炒め食べるから楽しみだぜ」

下包みする圭一を見て思わず噴出す梨花。それを見てハハハと笑う。

「沙都子は楽しかったのですよ・・・」

「楽しかった??俺も楽しかったぜ。二人と一緒に夕食食べれたかな。きつと祐樹に言えばあいつ泣き出すぞ」



「ありえるのです」

「何2人で話してるのですの??」

圭一と梨花よりも少し前にいた沙都子が遅いことに待ちきれないのかそれとも二人だけで話していることに疎外感を覚えたのか言ってきた。

「なんでもねえよ」

「なんでもないので」

ニヤニヤしながらいうからか、聡子は自分だけの獣にされていると思ったのか顔を真っ赤にさせてプルプルと体を震わせている。泣き目になっていたため。

「ふみや!?!」

思わず変な声を出してしまう沙都子。ガシガシと圭一が沙都子の頭をなでたのだ。ちょっと強かったのか、髪が乱れてしまった。ワタワタと直しながら上目遣いで言ってくる沙都子。

「レディーに対してそれはないと思いますわ」

「アハハ、悪い悪い」

「それでも沙都子は嬉しそうなのですよ。にぱー」

「梨花あああ!?!」

「みー」

自転車に乗って逃げる梨花を追う沙都子。そんな二人の背中を見ながら圭一は思っていた。

また野菜炒め食べたいな……。

風が優しく髪をなでる・・・。

「そっか、え、明日弁当の披露会だったな・・・どうしょ・・・」  
「せっかくの雰囲気をぶっ潰してしまう圭一だった。」

T o b e c o n t i n u e d

式々ヤサイイタメ〜（後書き）

海斗「ようやく前半が終わったって感じだな」

圭「また野菜炒め食いたいぜ」

海斗「野菜炒めか・・・1人暮らしたからよく作るな」

沙都子「ちよつと海斗さん！？こんなところで個人情報ばらしてもいいのですの??」

海斗「うわー、やっちゃまったぜ きらり」

圭「かっこつけてもだめだ!!」

次回予告 参々K々

参るK&Y（前書き）

海斗「タイトルは空気読めです」

圭一「いや・・・それはないだろ」

祐樹「うん・・・それはない」

海斗「だったら本編でどっちが正しいか勝負!」

参るK&Y

前原圭一と大葉祐樹の目の前には花の桃源郷、もしくは天国があった。そして手元には注文してあったデラックスチョコパフェとデラックスイチゴパフェがずんぐりと置かれていた。まったくこれだけでも十分罰ゲームなのだが、彼らにとってはむしろバッチコイというものである。

「ああ、癒される」

「目の保養にはぴったりだ」

間抜けな声を出している二人の周りには同じく鼻の下を最大まで伸ばした男たち・・・いわゆる女の子が大好きな暇人たちがここ美少女だけを雇うエンジェルモートに集まっていた。せつせと注文を取り、品を運んでいる少女たち。当店自慢の露出が高い服や、なぜかそれに猫耳などアニマル物をつけたり、ナースやらブルマといったコスプレをした少女たちもいる。そういう類が好きな男たちには馬鹿ウケである。

「見てみる祐樹いやここに集う狼たちよ・・・。まずはあの竜宮レナのいたってシンプルなエンジェルモートの服だ」

「圭一・・・あれははつきり言って目に毒だ」

「そうですね・・・中学生ってあんなに発育いいものなのか?」

短いスカートや胸元を恥ずかしがりながらもせつせと仕事に勤しむレナを男たちは興奮しながらその野獣のような目に焼き付ける。ここは撮影禁止であるためにどれだけ正確にその目に焼き付けられるかが男たちの勝負なのだ。それは年など関係ない。圭一と祐樹もまた然りだった。

こちらの視線に気づいたのかお盆で顔を隠しながらハウ〜などと可愛い悲鳴を小さく上げているレナ。しかしそれがさらに獣たちに火をつける。

『うおおおおおおお！！萌えええつえええ！！』

立ち上がる男現れるなど始まったばかりの祭りがいきなりボルテージアップである。しかしそんな湧き上がるのを圭一がまだまだ甘いぜという顔で言う。

「さあ、テメエら今度は右を見る！！」

『おう！！』

見事にシンクロした男たちの視線の先には会計の近くのケーキのショーケースの前で受付をしているアニマルコスプレとスクミズを組み合わせた格好だった古手梨花の姿だった。丁寧に来訪する男たちに接待している姿はまさにけなげというほかになかった。いわゆるロリコンたちにとってはもはや必死の光景だった。

「け・・・圭一。俺様を殺すつもりか??」

「何を言っている祐樹。お前のようにロリコンはあのような里香ちゃんとの組み合わせには弱いだろう。三口、あまりにも甘いと感じたと子たちがブラックコーヒーをがぶ飲みしているではないか。あれはなんとスティック砂糖10本分の甘さを持つてるのだ」

「なんていう甘さ!? 圭一はまだ大丈夫なのか・・・?? 俺はもう精神というか理性の限界だ・・・」

ちゅちゅちと指を振りながら言う。圭一と勇気と同席していた富田と岡村はというともはや鼻血が出る寸前である。しかしそんなこと

は関係ないと圭一は次のターゲットへと移す。

「今度は左だ!！」

『おお!！」』

そこにいたのはちょうど注文の品を渡していた運動服・・・いわゆる女子がはくブルマ姿の園崎美音だった。そこからは猫の尻尾と猫耳というオプシヨンパーツとさらにはちきれんばかりの胸!!胸!!胸!!胸!!男たちの視線はさらに真っ白なハリのある太ももにも釘付けとなる。こちらを向いてなにやら叫んでいるが無視無視である圭一と祐樹。

すると後ろできやあとという聞き覚えのある声が出た。振り向くとそこにいたのはどこぞやのメイド&ロリ好きな医者が発注しただろうメイド服を着込んだ金髪少女が商品をこぼしながらしゃがみこんでいた。どうやらその席に持っていく途中で重さに耐え切れずにこぼしてしまったようだ。ズボンについてしまったらしい男がなにやら言っている。

「沙都子!！」

どうやらズボンにこぼしてしまい、それをふき取れというんだ。女の子にそれも幼い小学生に対して言うていいことではない。しかし興奮でボルテージが上がっていた男たちにそんなことを考える余裕など皆無だった。拭き拭きコールを連呼する。沙都子も困惑顔であり、他の部活メンバーも仕事の手を止めて心配顔である。

そんな彼女のそばに立ったのは部活メンバーの前原圭一と大葉祐樹だった。カッコアよく出たかったのだが勇気はパフェであろうかクリームをかぶった沙都子を見てはかなく鮮血を飛ばしたのだった。

そのため仕方なく血止めのティッシュをは何つつこんでいた。せつかくのかっこいい登場が白けてしまいそうだ。

「おいその毒素のたまったびるっぱらを持つやろっ！ー！こんな可愛い女の子に無理やりやらせることか！？」

「そうだ！ー！俺の（・・・）沙都子に手を出すことは許さん！ー！」

「お前は沙都子の父親か！ー！」

「兄だ！ー！にーにーだ！ー！」

なにやら2人で騒いでいると、邪魔されたことで気分を悪くしたびるっぱらの持ち主が文句を言ってきた。

「さっきから君たちうるさいけどこのこのなんなの？？僕はただご奉仕してもらいたいだけなんだけど？？だって彼女はメイドでしょ？？それに今日はフェスティバルなんだからそれくらいのことはいしてもらわなきゃね」

そつだそつだという声上がる。それを聞いてさらに縮こまってしまふ沙都子。

「シャーラップ！ー！」

祐樹が叫ぶ。勢い余って鼻からティッシュが飛び出てまた鼻血が出たことでもかっこいい雰囲気は吹き飛んだ。何やってるんだよとジト目で圭一が見る。

「お前らはここに何を楽しみできている？？」

「それはもちろん・・・」

一呼吸置いてから周りの男たちが言う。





チャイナドレス女王様お姫様スクール水儀ワンピース水着ビキニ水着スリングショット水着などあらゆるコスプレの楽しみがあるだろうがあああアア!!!」

『おおお!!!』

「みーつ!!!それはしぐさや表情だ!!!どんなに着慣れたものでも見られるということには多少なりとも羞恥心が付きまとう。そんな女の子の見えないか見えるかどうか難しいその表情を宝探しのように見つけたり!!!着慣れないものを着た女の子たちが必死に周知と戦い思わず隠したり赤面するところを見るのはまさにお宝見つけたりという瞬間だつあああ!!!」

『おおおお!!!』

「間違つてた・・・僕は間違つてたんですね・・・」

「ああ、君は確かに間違つていた・・・しかし今この俺から講義されたことを肝に銘じればきっと楽しいコスプレ干渉ができるってほほ!!!」

突如圭一の頭にお盆が飛んできて、見事に即頭部に命中する。バツターンと倒れこむ恵一と、近くで座り込んでいた聡子に近づいたのは厨房のほうで働いていた小野ミサキと泉涼子だった。2人ともシンプルなウエイトレスの格好をしているが角度を間違えばもろに見えてしまうくらいのも物だった。

「何熱弁してるのよ圭!!!さっさと沙都子ちゃんのこと助ければいいでしょ!!!」

「ううう、即頭部が痛い・・・」

「圭一大丈夫か!?何しやがるミサキ!!!」

「何しやがるじゃないでしょあんたたち・・・。沙都子つたらあなたたちもこの人たちと同類だつて言つ目で見てるわよ???」

え？？つと言う顔をして圭一と祐樹は差都子を見る。すると沙都子はぎくりと方をびくつかせ、たじろぐ。一歩近づくと一歩下がる。これはやっちまった感があった……。

「ふ……この萌えの伝道師の俺様に、一片の悔いはないぜ」

なぜか一筋の涙を流しながら圭一は立ち去ろうとする。そんな圭一に対して男たちは一つの質問をする。あなたの名前は一体？？というものだった。にやりと笑った圭一は声たからかに言う。

「萌えの伝道師！！Kだ！！」

立ち去る圭一いわくKに対して羨望のまなざしを見せる男たち。そんなKの後ろに行く祐樹もまた声たからかにして言う。

「俺様は萌えの伝道師Kの相棒……Yだ！！覚えて置けこのやろう！！」

『お前は空気読め！！』

「何で俺だけこんな理不尽な扱い！？」

T o b e c o n t i n u e d

参るK&Y（後書き）

海斗「ほら見る俺が正解だろ??」

祐樹「ふざけるな!!なんだ俺のこのひどい扱い!!まったく醜態さらしてるだけじゃねえか!!」

海斗「だってそういうキャラだから」

祐樹「うわあああ!!」

海斗「次も見てくれたら嬉しいぜ!!」

圭「コメント・評価、その他アドバイスがあったら嬉しいぜ」

## 四つゲキヘンく（前書き）

大変遅くなりました。執筆開始です。

## 四ヶキヘン

平和な時間が流れていた。

のどかな田舎村で、まるで世の中の恐怖だなんて関係ないとも言ように淡々と時間が流れていた。しかし、それはつかの間の休息にしか過ぎなかった。

その大きな急激な変化は突然音連れたのだった。

中学1年生である前原圭一はいつものとおり、ゆっくりと目を覚ました、周りには呑み散らかした炭酸飲料水の官やら、漫画、雑誌、その多機能のうちにやっておいて置いた宿題たち。そして男性としての必需品の数々。

一通り片付けると着替えを終えて、洗面所におり、洗顔をする。首たからかけていたタオルでごしごしと顔をこする。冷たい水で一気に冴え渡った意識が覚醒。今日もよい1日になるだろう。そう思っていた。

しかしふといつもと自分の顔の部分でおかしいところに気がついた。

「ん??なんだ??」

不意に感じた違和感。それは鏡に映るいつも見慣れているはずの自身の瞳。

「なんだこれ・・・」

思わず怖気がするくらいだった。まるで血塗られたみたいに真っ赤な瞳。しかし、恐れというよりは畏れだった。

体中から沸き起こるその並々ならぬ躍動感。それはいつもの自身のからだではなかった。そう感じていた。

最初は寝不足かと思ったがいつもどおりの終身だったために具体的な原因が思いつかなかった。

仕方なくそのまま今へと向かい、テーブルにはいつもどおり母が朝食を作っていてくれた。

「圭一、早くしないとまたレナちゃんに迷惑かけるわよ??」

「わーてるよ、それじゃいただきます」

残りの料理・・・つまり弁当の詰めに取り掛かっている母の後ろで出来上がっている朝食を口に運んでいる。とんとんとまな板を叩く包丁の音。ことごととなべの中がなる音。外から聞こえてくる小鳥たちのさえずり。奥の書斎から聞こえてくる親父の唸り声。いつも以上に色々な音が聞こえてくるものだと、更にテレビを見ながら圭一は思っていた。ごちそうさまと食器を返そうと台所へと向かったところで母藍子がいつもの自分の息子と違うことに気づいた。異常なまでに瞳が赤かったのだ。

「ちよつと圭一??あなたその目どうしたの??」

あからさまに真つ赤であることを指摘する。ああと一声言つて。

「朝起きたらこうなつてたんだ。別にいつもどおり寝ただけだな」

おかしいな。つとでも言うように頭をひねりながら言う圭一。しかし、い日旅の瞬きでその赤みは取れいつもどおりに戻っていたことを、圭一も藍子も気がつくことはなかった。

そしていつもどおりの時間。圭一にとっては普通なのだが、待っていてくれる同級生の女の子。竜宮レナにとっては今か今かとはらはらするくらいのものであった。

「圭一くん・・・。今日もぎりぎりかな??かな??」

そんな風に考えながら腕もとの時計をちらちらと確認しつつ、圭一が来るはずである方向を向いて待っていた。おーいという元気な男の子の声を聞いてそれに答えるように大きく手を振る。これがいつもの恒例パターンである。

「おはよう、レナ。へへ、間に合っただろ??」

「おはよう、圭一くん。そんな得意げに言つても意味ないんだよ??今日だつていつもみたいにぎりぎりになつちやいそうだし」

少し怒つたように言うレナ。それを見てごめんと苦笑いしながら謝る圭一。これも今に始まつたことではないのだ。だからそれ以上はレナは何も言わなかった。いつもどおりたわいもない話をし奈良

が、圭一が少しエツちな話をしてレナが赤面、カアイイ物を発見すると圭一をレナパンで吹き飛ばしてお持ち帰りをしようとするレナ。そうこうしているうちに目の前には待ちくたびれたといわんばかりに口を尖らせた魅音とまた馬鹿をしたのかそんな祐樹をしかっているミサキ。ただ一人われ関せずと淡々と本を読む涼子。圭一とレナがきたのを見てぱたりと本を閉じる。

「けくいくちやくん??また遅刻かな??おじさんの堪忍袋は切れそうだよ??」

「いやくすまないな。俺はいつもどおり出てるんだが」

「そのいつもどおりが悪いんだって。もう少し早く来ればこれから急ぐこともないんだよ」

いつものように圭一をからかうように言う魅音。それに苦笑いの圭一。

「それにしても・・・」

魅音が圭一がいつもと雰囲気が違うような雰囲気をかもし出していることを感じていた。それは園崎家としてさまざまな武道や習い事を納めているからこそ彼女が感じ取れるものだった。同じくミサキも。そして特に洞察力が並外れて鋭いレナもそれを感じ取っていた。

やんわりとした、どこことなく暖かな感じではなく。上から押しつぶすような、ものすごい重圧感。祐樹はなんだなんだとまったく空気を読めておらず、涼子はわれ関せずを決め込んでいる。

「圭のその赤い目ってどうしたの??」

「ハウ、さつきまでは、そうじゃなかったのに」

「ああ、なんだか朝起きたらこうなってたんだ」

圭一もわからないと、質問してきた3人に言う。祐樹はようやく何を話していたのか理解したようだ。

そうしてようやく学校に着いた圭一たち。走ったためにかなり息が弾んでいるが、圭一だけはいつもよりぴんぴんしていた。というよりはまったく息切れをしていなかったのだ。



(不思議だ・・・)

圭一は素直にそう思った。

しかし圭一にとつてまだまだ試練は続く。

そう、彼よりも年が1つ下である北条沙都子の仕掛けたトラップがあるのである。靴を履き替えて時間内に間に合ったものの、最後の試練である扉の前で圭一は思わず立ち尽くす。

いまだ全てを回避し切れていない圭一。まあ、トラップに引っかかった後は追いかけてのでこピンがお約束になっているのだが・・・。

「ほらほら圭ちゃん早く入りなよ〜」

「おうわ!? 何押ししてんだよ魅音!!! 危うく最初からトリプルコンボ食らうところだっただろ!!!」

そんな興奮気味に怒る圭一を見て魅音はけらけらと笑っている。

その時圭一の瞳がいつもの黒に戻っていたのに気づいていたのは洞察力が鋭いレナだけだった。

訝しげな表情になるレナだが、原因が分からないために聞いても先のように圭一にもわからないで済まされるので聞かないことにした。

もともとそのような体質なのか、それとも病気ではないのか。歩いているときに一度医者に行ったほうがいいのではと念を押していた。

圭一もああ行ってみると軽く肯定していた。

そうして立ち尽くして数秒。

「圭一、さつさとは楽くれよな。男だったら当たって碎けるだ!!!」

「碎けたときの損害がでかいんだよ!!!」

あるときは水をかぶり、あるときは顔面を床に打ちつけ、あるときは墨汁とのディーブキス・・・ETC。

いよいよ始業する時間である。いい加減入らなければみなで先生からのOSI OKIである。地獄のカレーという名の・・・。

「ああもう、俺は行くぜ!!! 男前原圭一を特とみよおおおお!!!」

圭一は勢いをつけてがらりと扉を開けると突撃していく。しかし入った瞬間ずさあああつという痛々しい音を立てながら床を滑っていた。

皆が床を見ても別段何かあるわけでもない。

「いててて・・・、警戒しすぎて、なんもなかったから拍子抜けした・・・」

真っ赤になつた顔をこすりながら圭一は言う。そして皆は思う。

何故沙都子のトラップがないのかと。圭一の転校して来た当初から続けられてきたトラップが今日はなかったのだ。

不思議に思い、沙都子を探す。すると・・・。

「沙都子??」

祐樹が驚いた表情をしながらその名を呼んだ。

なぜならあの元気な沙都子がじつと机に座つたまま元気のなさそうな表情でいたからだつた。

あれだけ平和だつた日常が一気にガラガラと崩れていく音を圭一ともう一人が聞いていた。しかし圭一は一体それがなんなのか、まだ知る由もない。

T o b e c o n t i n u e d

## 四ヶキヘン（後書き）

コメントなどお待ちしています。  
それではまた来週。

## 五ノイヘン

古手梨花は隣に座り、死人のように虚ろな瞳をした沙都子を見ていた。こんな沙都子は見えていられない。しかし、友達でありながら梨花にできることはなかった。なぜなら彼女に降りかかってしまった不幸はそんな生易しいものではないのだ。

古手梨花と北条沙都子はお互いに両親を早くになくしている。一応の生活能力はあったためにお互い友達同士助け合いながら生きてきた。

古手梨花は4年前の綿流しの日に両親をそれぞれ失い、北条沙都子は3年前と2年前と続けて両親そして最愛の兄を失ったのだ。

兄・・・北条悟史は無慈悲に暴力を振るい続ける二人の兄夫婦から沙都子を必死に守っていた。しかし、そんな兄が突然として鬼隠しにあったように姿を消してしまったのだ。叔母は死亡。

こうして連続して綿流しの日に家族を失ってしまった。人々はそれをオヤシロ様の祟りという。

しかし、古手家の跡取りであり、オヤシロ様の生まれ変わりであるからだ。そして彼女自身・・・オヤシロ様自身がそんなことを望んではないということも梨花がよく分かっていた。

誰かがオヤシロ様という存在を利用した連続殺人事件を引き起こしている。それだけははっきりしているのだ。なぜなら彼女は必ず綿流しの日に殺されるといふ運命を延々100年は続けているのだから。

「梨花ちゃん・・・」

向こうから声が掛かった。声の主からして・・・。

「圭一??」

いつも沙都子のトラップに右往左往している圭一だが、興はなぜかトラップがなかったことと聡子の様子がいつもと違うことに違和感を覚えたのだろう。彼の後ろには魅音たちもいた。彼女たちも心

配そつな表情で沙都子を見つめる。この状態の沙都子を見るのは彼女たちにとっては二度目かもしれない。

彼女の兄悟史がいなくなった2年前だ。

「こっちにきてくれない??」

リーダー格である魅音が言う。梨花は黙って頷いてそちらに向かった。

「梨花ちゃん・・・、沙都子どうしたの??」

「・・・」

「黙ってても分からないよ?? 私たちになにかできることがあるかもしれないから」

「聞かせてくれない??」

レナとミサキが言う。彼女たちも2年前の沙都子の姿を見ているからもうあんなことにはさせたくないという気持ちでいっぱいだった。圭一と涼子はその時まで来ていなかったために分からないがそれでも何か重大なことがあったのだろうということは雰囲気からして読み取っていた。

「・・・てきたのです・・・」

梨花がようやく口を開いたと思ったら、あまり声が小さかったために聞き取れなかった。魅音はもう一度たずねる。しかし口を開きかけたりかだつたが・・・。

「はいみなさん、ホームルームを始めますよ」

タイミング悪く知恵が教室に来てしまったのだ。

五つイヘン（後書き）

次回六つキヨウヘン

赤き瞳が握る鍵とは・・・???

## 六〇キヨウヘン

現在は授業中である。ホームルーム前に圭一たちは何故沙都子があそこまで元気がないのかと聞こうとしていたのだが、梨花が口を開きかけたところで運悪く知恵が教室に入ってきてしまったのだ。待ったくまが悪いとはこのことだと思った。

ちらりと魅音が沙都子のことを見る。黙々と勉強をしているが、その姿はとても痛々しかった。

あの姿を見るのは二度目だった。

最初のは彼女の兄がいたときだ。しかし彼女にとっての唯一とも言うていい盾が今はいない。

去年のの事件で行方が分からなくなっているのだ。曰く鬼隠しにあったのだ。彼女自身彼が死んだとは思えない。しかし生きているという証拠もない。

今彼女に何が起きているのか。予想できるのは最悪のものしかなかった。

魅音が悩んでいるとき、同じくしてレナもまた悩んでいた。沙都子のあの姿は彼女の兄である悟史が転校してしまった年の姿と同じだからだ。

彼女のために何かしてあげたい。しかし非力な自分たちがまたあのかのときのよう惨めな結果で終わってしまうのではないか。あの時何もできなかったことがまだトラウマであった。

レナと同じトラウマは祐樹、ミサキも同じであった。

やっぱりあれなのかな・・・??かな・・・??

それが大きく占めてると思うよ・・・。だって沙都子があそこまで落ち込むだなんて、両親とか悟史くんがいなくなったときくらいだし・・・。

でもあれは落ち込んでいるって言うよりも怖がってるって思うんだけど・・・。

怖がっている……。だろうね。何であいつが……。また沙都子が幸せに過ごせると思っていたのに!!

まったくだぜ。あのクソオヤジ……。どれだけ俺の沙都子を苦しめれば気がすむんだ!!

ちよつと祐樹??あまりよろしくない言葉混ざってたようなきがするんだけど??

何を言う??沙都子は俺のもの。沙都子の婿は俺。入江の野郎にだけは沙都子は譲れネエ

呆れたの……。ハウ。そんなのだから圭一くんは沙都子ちゃん盗られちゃうんだよ??

な……。なんだと??沙都子が……。圭一に??

知らなかったの??沙都子ったら最近何か女の子らしくなくなつたな。つてみんなで思ってたんだけどあれはまさに恋する乙女ね。

。。。。

話がそれていってしまったが、差と子のことを知っている彼女たちの同じ答えだったのは……。あいつの存在だった。

それから授業が終了し、現在は昼食、楽しいはずのお弁当タイムだった。しかし沙都子には弁当がなかった。聞いてみると作るのを忘れていたというのだ。梨花と一緒に住んでいるのではないのかと疑問に思った圭一が聞くと叔父が戻ってきたので一度家に戻っているのだという。

それを聞いて圭一は血のつながりがある人がいてよかったなと思う。しかし周りの雰囲気は最悪だった。沙都子の言葉……。叔父が戻ってきた。それが一気に場の雰囲気を壊したのだ。

「良かったな沙都子。叔父さんが帰ってきて」

「!!そ……。そうですわね。うれしいですわ」

頭をガシガシと圭一はなでてあげる。彼はなにも知らない。仕方がないのである。沙都子も体を震わせながら、言う。



「おい圭一……ちよつと来い……」

「どうしたんだ?? 祐樹」

「いいからちよつとこいつつってんだよ!!」

「!!」

突然声を荒げる祐樹に教室内が驚いた。それ以上に顕著に反応を見せたのは沙都子だった。まるで何かにおびえるようにからだを自らの腕で抱きしめながら震えている。

皆から分けてもらった食事に手をつけなくなっていた。

祐樹はというともものすごい怒りの形相で圭一の腕を乱暴に掴み、立ち上がらせると引きずるかのようにつれて教室を出る。

圭一は何がなんだか分からないという状態である。そして教室を出るときに見た。

「あれ?? あんな子いたっけ??」

巫女服に、角型の……あれは力チューシャであろうか?? それっぽいものをつけた少女がこちらを心配そうに見ていた。なぜか梨花の隣で……。

圭一は祐樹に連れられた学校の裏まで来ていた。いちいち靴を脱ぐのも億劫だったので中ズツクのままで。

「おい、祐樹!! いい加減に連れてきた理由を言ってくれないか!」

圭一が怒るのはもつともだ。彼を怒らせることを何かしただろうか。しかし祐樹は冷静そのもの。圭一の怒りはどこ吹く風といったところだ。

「お前に言っておかなければいけないことがあったんだ……」

祐樹の雰囲気からして相当重大なことなのだろうと圭一は思う。

それは正解であった。

「沙都子のな……叔父である鉄平は……裏社会じゃちよつとお尋ね者なんだよ」

「まじかよ・・・ってまさか・・・」

圭一はそれだけで十分だった。沙都子の叔父鉄平は裏社会の人間。そんな人間の中にまともな人間がどれだけいるだろうか。

園崎組は何かまともな方であろう。しかし圭一にとって走らない鉄平、そして昨日とは打って変わって元気のない沙都子。それだけで彼がどれだけ危険な人間なのかが分かった。

「その・・・悪いことしたな・・・」

「沙都子に言え・・・。お前が悪いわけじゃないけど、それでも沙都子の心には傷はできた。あいつが戻ってくるのは2年ぶりだな、沙都子の兄がいたとき以来だ」

「あいつにも兄がいたんだったな」

「ああ、いつもにーにーって言うてくつついてたな。必死に沙都子を守るうとしていた。俺はうらやましかつたよ・・・あんなに沙都子に頼りにされているんだから・・・」

ちよつと嫉妬を含んだ表情をする祐樹を見ている圭一だった。

どかどかと廊下を歩く圭一と祐樹。

「悪かったな・・・。いきなり引つ張るだなんて」

「まさか最初はあつち圭でもあるのかと思っただぜ・・・。節操に危機感を覚えたぜ」

「ばかやるおおおお！！俺が愛するのは口リ！！つまり沙都子と梨花ちゃんだ！！」

「お前それ言つてて恥ずかしくないのか？確かに俺もそういう恋ばなは好きだけどさ」

もう少し抑えた方がいいんじゃないかという圭一。あまり行き過ぎるとそれが入江のようにストーカーまがいなものに昇華しかねないからだ。

そしてがらりと教室の扉を開けた。すると・・・。

「いやあああああつアアアアあああつあああああつあ





『沙都子・・・』

とある少女は圭一の瞳が赤く変わっているのに気づいていた。それはどことなく自分に似ているようなきがしていた。しかしそれを誰にもいえない。

誰も聞いてくれないから・・・。

『心配するな・・・おまえの言うおじさんは来ないから』

「いや・・・こないで・・・。ごめんさい・・・ちゃんとやります・・・。壊さないで・・・。」

沙都子はただただここにいないはずの叔父鉄平に対して謝るばかりで支離滅裂な言葉を羅列する。

きつと子の言葉をいつも家で言っているのだろうと思う。

よく見るとところどころにあざができている・・・虐待だ。

『大丈夫だから・・・。みんな沙都子の味方だから』

優しく圭一は沙都子に語りかける。そのはたから見れば恐ろしい赤き瞳のまま、沙都子の瞳を見ながら。

「・・・ほんとうですの??」

『ああ、だから何も怖がることはない・・・。俺もいる』

沙都子は目の前にいる少年が圭一であることは分かっていた。しかし瞳が赤くやや睨んでいるように感じられた。しかし不思議と恐怖はない。

むしろ、心にあつた恐怖というものが抑えられるというか、取り除かれる感じである。そして圭一は心に決めていることがあつた。

行方不明の悟史が見つかるまで自分が沙都子の兄になってあげよう。今までも沙都子のことを妹のように見ていたが、しかし付き合い方はどうしても年下の友達。

本当の妹のように見てあげようと決めたのだ。

『俺が悟史が戻ってくるまでお前の“にーにー”になってやる。だから心配するな』

そういつて優しく頭をなでてあげる。

「うう・・・にーにー!!」

そういつと圭一に沙都子は抱きついた。ただにーにーと圭一を呼びながら……。

まるで悟史と圭一を重ね合わせているように……。

「あああああ！なんてうらやましんだアアアアア！！」

突然シリアスムードをぶち壊す声。

いわずとも知れたKY男……大葉祐樹だ。

「俺もレナなんか止めないで颯爽と現れたヒーローになってレナパ  
ン止めてればよかったあああああ！！！」

「ちよつと、祐樹？？」

呆れた様子で祐樹に話しかける魅音。他のメンバーも呆れて言葉も出ない。

「ちよつと……祐樹くん??」

後ろから黒いオーラを纏ったレナが現れた。その手にはいつの間にか杖……。ではなく鈍を持っていた。キラリと鈍い光を反射しているそれ。砲撃ではなく鮮血が飛ぶかもしれない……。

「ちよつとOHANASIしようか」

「いやあああ！どこの白い悪魔!？」

「いや！！舞台設定とか時代設定違うから!!！」

こうして大葉祐樹の姿を後日見たものはいない……。

「いや、それはないから!!！」

大葉祐樹は生きていた。

セウカソク (前書き)

二ヶ月・・・どんだけ溜めてんだよ・・・俺。

## 七、カソク

沙都子が圭一のことを「にーにー」と呼ぶようになってから一週間が経っていた。

そのまま北条家へと返すと叔父である鉄平にまた虐待される危険性があるということで圭一の両親は沙都子とともに一緒に生活していた梨花も前原家へと招きいれた。

どうしてそれが可能になったかという点、おとなしくなった沙都子がぼつぼつと鉄平にされた虐待のことを告白したことが証拠となり興宮の児童相談所と警察が動いて逮捕に至ったのである。

沙都子に付けられていた痛々しい怪我から見ても虐待は明白であったためにまったく鉄平の証言を聞き入れることなく逮捕に至った。警察や児童相談所の対応はこちらからの連絡が付き次第にすぐに動いてくれて、なんとか沙都子を救い出すことができた。

学校で事情聴取を受けてからじつと圭一の服にしがみついたままだった沙都子。圭一の両親が圭一、沙都子、そして梨花を迎えに来て、前原家へと戻った。

家族……。それはとても暖かな場所である。しかし沙都子の場合はそれとは反対のとても冷たいものであってもじやないが安らぎを得ることができるところではなかった。帰ると繰り返される虐待という名の小間使い。それに対して必死に耐えられたのは唯一の安らぎと暖かな場所を与えてくれた悟史という兄の存在だった。

しかしその悟史も昨年のことで行方が分からなくなっていることから沙都子の安らぎは完全になくなってしまっていた。

それからはずっと自らを守るためと称して必死にトラップ作りに没頭した。学校が終わってからすぐに裏山へといってはひらめきから生み出したそれを作り出し、いつ襲われても逃げ込めるようにし



つかりとどこに何があるのかを把握しながら。

普通の小学生が一人でできないものもあつたが、それもまた、無理をして一人で作り上げた。ただ自分のみを守るために……。

このとき沙都子は周りが敵しかいないと……敵が自分を狙っていると錯覚していた。

梨花と一緒に住むようになってからはそんな恐怖を感じることもなく楽しく、更に年長の魅音から信勝への誘いのおかげで人と接することに恐怖を感じなくなった。

以前は軽い人間不信であつて、北条家であるからといって裏切り者扱い、はねもの扱いとして村の皆からは見られていた。

しかしそうは見ない人たちもたくさんいることを知ることができたことでそんな人間不信となんとか脱出することができた。

そんな彼女の元に兄のような存在が現れた。前原圭一。初めは都会からやって来たということだけでただ勉強ができるだけのものやっ子だと思っていた。

しかし触れ合ってみるととても面白く、何度も自分のトラップにきれいに引っかかっては注文どおりに自分のところには知ってきてはいちいち構ってくれる。

いつの間にか彼女のトラップは自分に来る敵から身を守るためではなく、ただ兄的存在の圭一にかまってもらいたいということから作られるようになった。

できる限り過激に……それでいて決して圭一が怪我をしないようなトラップ。そんなトラップを考えているときの彼女の表情はとても生き生きしているものであり、一緒に住んでいた梨花もまた、そんな笑顔になってくれたことに嬉しいといっていた。

古手梨花もまた前原家に引き取られた一人だ。彼女は沙都子と共に古手神社の近くの家に二人だけですんでいたのだ。彼女もまた、両親を2年前に失い、独りぼっちになつてしまった。

御三家の1つの古手家ということで親戚のミサキの家や他の御三家、更に村の人たちからの助力もあつて何とか興まですぐすことが

できていた。

始めは養子としてこないかといわれていたが、残される子の神社を守らなければいけないということでそれを断ってきた。

そんな一人だった彼女のところにやってきた沙都子もまた同じく心に傷を負っていた少女だ。それでも彼女たちは必死にお互いに助け合って生きてきた。梨花には誰にもいえない悩みもある。それは彼女だけではとてもではないが解決できることではなかった。それでも彼女はたった一人でそれに立ち向かう。己を・・・そして子の村に住む仲間たちを守るために・・・。そんな彼女も少しの間だけ・・・暖かな温もりを感じてもいいのではないだろうか。

前原家に到着する・・・。ゆっくりと圭一がドアを開ける。そして梨花と沙都子は大きな声で言うのだった・・・。

「「「ただいま！！」」」

七カソク（後書き）

ようやくここまで来た・・・。  
この巻もあと4話くらいかな？？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2929p/>

---

ひぐらしのなく頃に 解

2011年10月7日15時02分発行